



図書館サポーターズだより

平成 26 年 5 月 8 日

第 60 号

明日に吹く風



GW も終わり、夏への期待が高まる季節になりましたね。そろそろ新年度の大学生活にも慣れて少し疲れが出てくるころです。そんなときは図書館で読書を楽しみ、ゆっくりとした時間を過ごしてみたいかがでしょうか。

* 図書館サポーターズ推薦図書 *

■『謎ときはディナーのあとで』 東川篤哉著 小学館 1F メインカウンター(913.6||H55||2)

大財閥のお嬢様であり、刑事でもある宝生麗子と彼女に仕える毒舌執事の影山が難事件を解決していく。しかし、実際に事件を解決に導いているのは、影山一人の推理力である。この本は、影山がどのようにして事件を解決していくのか、が最大の見どころであるが、影山が執事という立場でありながら麗子に暴言を吐く場面や、麗子と彼女の上司である風祭のユニークなやり取りも魅力の一つである。



わたしは、今までミステリー小説などは、推理が難しくてあまり読むできませんでした。しかし、この本は本格的なミステリーでありながらも、ユニークなシーンがたくさん盛り込まれているので、自分で推理をしつつ最後まで楽しみながら読むことができました。普段あまり本を読まない人や、ミステリーやサスペンス小説を難しいと感じる人にとっても、とても読みやすい本だと思います。ぜひ、一度読んでみてください。(Y.K)

■『アルジャーノンに花束を』 ダニエル・キイス 早川書房 1F メインカウンター (933.7|| Ke67)

32歳になっても幼児の知能しかない主人公(チャーリー)が、手術によって天才へと生まれ変わる。これだけ聞くとチャーリーにはさぞ幸せな生活がまっているのだろと思うれるが、実際には過酷な運命が彼を待ち受けていた。

チャーリーが“賢くなれば、みんな自分を好きになってくれる。”と思っていたように、わたしも小さい頃それと似たことを考えたことがありました。しかし、本当に人を惹きつける「何か」とは、きっとチャーリーやわたしが考えたものではなく、キニアン先生が手術前のチャーリーに見出していた、チャーリー特有の「何か」(205 頁 2-4 行など)なのだと思います。言葉が上手に使えなくても、考えが上手くつたえられなくても、みんなのペースに付いていけなくても、皆、感情や気持ちを持った1人の人間だと気がつきました。チャーリーもわたしもその1人です。学年・学科を問わず、たくさんの人に読んでもらいたいです。(H.H)



■『夜のピクニック』 恩田陸 新潮社 1F メインカウンター (913.6||O65)

全校生徒が夜通しで八十キロを歩く「歩行祭」。年に一度のこのイベントは三年生の甲田貴子にとって今回が最後だった。面倒と苦痛でしかなかった歩行祭も最後となれば特別なものに思え、貴子はある一つの賭けを胸に、歩き出した。

この本は、映画化もされている第二回本屋大賞を受賞したベストセラーです。貴子の想い、それを勘違いしているクラスメイト、密かに伝えられていく「噂」、「缶コーヒー」、「おやつ」。どれも傍から見れば些細なことのように思えますが、小さなことに悩み、喜び、すれ違い、向き合う姿はまさに青春そのものです。“ただ歩く”それだけの行事なのに、読み進める内にそれがとても愛おしく思え、夜が明けた後の「明るさ」は言葉に代えがたいものがあります。ぜひ、大学生になった今だからこそ、あらためて青春のおもしろさを味わっていただきたいです。(M.O)

